
2019年度日本語教育センター活動報告

1. 2019年度日本語教育センター運営体制

運営委員会

- センター長：丸山 千歌 (異文化コミュニケーション学部教授)
副センター長：巖 成男 (経済学部教授)
運営委員：井川 充雄 (全学共通カリキュラム運営センターコア会議から、社会学部教授)
運営委員：黄 盛彬 (国際センターから、社会学部教授)
運営委員：韓 志昊 (センター長指名による、観光学部教授)

実務委員会

- センター長：丸山 千歌 (異文化コミュニケーション学部教授)
副センター長：巖 成男 (経済学部教授)
センター員：池田 伸子 (異文化コミュニケーション学部教授)
センター員：韓 志昊 (観光学部教授)
センター員：金庭 久美子 (特任准教授)
センター員：藤田 恵 (特任准教授)
センター員：数野 恵理 (教育講師)
センター員：小林 友美 (教育講師)
センター員：嶋原 耕一 (教育講師)
事務局：吉田 友子
事務局：山崎 真紀子
事務局：関口 資子
事務局：森屋 京子

兼任講師

- | | |
|--------|--------|
| 浅野 有里 | 李 奎台 |
| 泉 大輔 | 井上 玲子 |
| 小柳津 成訓 | 神元 愛美子 |
| 川端 芳子 | 小森 由里 |

齊藤 紀子	佐々木 藍子
沢野 美由紀	島崎 英香
高嶋 幸太	武田 聡子
谷 啓子	富倉 教子
長島 明子	長谷川 孝子
布村 猛	東平 福美
開 めぐみ	平山 紫帆
三浦 綾乃	守屋 久美子
山内 薫	森井 あずさ

2. 活動報告

日本語教育センターホームページにて3月末公開予定
<https://cjle.rikkyo.ac.jp/reports/default.aspx>

目次（予定）

1. 各科目についての報告
2. 2019年度 Placement Test 実施報告
3. 2019年度日本語相談室実施報告
4. 2019年度立教大学漢字検定試験実施報告
5. 2019年度日本語自主学習用図書貸し出し実施報告
6. 留学生による日本語スピーチコンテスト実施報告
7. 日本語教育センターシンポジウム実施報告
8. 日本語教育センターニュースレター発行報告
9. 短期日本語プログラム報告
10. センター員活動報告
11. 2019年度FD記録

日本語教育センターセンター員 教育研究業績一覧

池田伸子

研究論文

1. 「21 世紀における日本語教育センターの役割——多文化共生社会の実現を目指して——」『日本語・日本語教育』第 3 号、立教大学日本語教育センター、2020 年
2. 「『特別』な支援からの脱却を」、『IDE 現代の高等教育』2019 年 10 月号、18-21 頁

講演

1. 「性別でなく自分らしく」2019 年宇都宮市女性団体連絡協議会大会、於宇都宮市役所、2020 年 2 月 15 日（基調講演）

研究助成

1. 2017.4～現在 科学研究費助成金（基盤研究（C））「大学日本語教育プログラムを対象とした開発型評価——持続可能で有用な開発型評価とは」（研究分担者）（課題番号：17K02863）

丸山千歌

研究論文

1. 「日本語学習者の人生の径路に表れる日本との接触——日本に住み、働きつづける日本留学経験者 D の場合——」（小澤伊久美との共同執筆）『日本語・日本語教育』第 3 号、立教大学日本語教育センター、2020 年
2. 「短期日本語プログラムの授業実践と展望——「成果発表」の指導における課題と改善への取り組み——」（藤田恵・金庭久美子との共同執筆）、『日本語・日本語教育』第 3 号、立教大学日本語教育センター、2020 年

報告

1. 「学内リソースを生かした日本語サポートの設計——「オール立教」の取り組みが留学生へのメッセージ——」『大学時報』第 388 号、2019 年、一般社団法人日本私立大学連盟、46-53 頁
<https://daigakujihou.shidaiaren.or.jp/download/?issue=388§ion=2>

研究発表

1. 「日本に住み、働き続ける径路に表れる日本留学、日本語学習経験」（小澤伊久美との共同ポスター発表）、CAJLE2019 年次大会、於カナダ、ビクトリア大学、2019 年 8 月 7 日
https://www.cajle.info/wp-content/uploads/2019/09/30_CAJLE2019Proceedings_Ozawa-Ikumi-and-Maruyama.pdf

2. 「日本語学習者 X が日本に住み続けることを促進・抑制する記号 —— X の「深い経験づけ」としての留学経験の分析から ——」（小澤伊久美との共同ポスター発表）質的心理学会 第16回全国大会、於明治学院大学、2019年9月21日
3. 「評価的思考を生かしたプログラム運営 —— 内部評価者育成の重要性」（小澤伊久美との共同発表）沖縄日本語教育研究会第17回大会、於琉球大学国際教育センター、2020年2月29日

講演

1. 「Can-do statements を活用した教材開発と教師教育」2019年全国日语骨干教师论坛、於華東師範大学、2019年10月19日（招待講演）

ワークショップ

1. 「PAC分析ワークショップ」第11回東京大学文学部日本語教育研究会、於東京大学文学部、2019年7月13日（小澤伊久美と共同で講師）

研究助成

1. 2016.4～現在 科学研究費助成金（基盤研究（C））「「移動して学ぶ」時代の日本語教育 —— 留学体験の意味づけの変容・維持過程の分析から」（研究代表者）（課題番号：16K02824）
2. 2017.4～現在 科学研究費助成金（基盤研究（C））「大学日本語教育プログラムを対象とした開発型評価 —— 持続可能で有用な開発型評価とは」（研究分担者）（課題番号：17K02863）

金庭久美子

研究論文

1. 「問い合わせ」のメール文におけるドイツ語母語話者の使用状況」（村田裕美子との共同執筆）、『日本語プロフィシエンシー研究』、7号、50-71、2019年6月、日本語プロフィシエンシー研究学会（査読有）
2. 「日本語メール文に見られる伝聞表現 —— 相手からの情報を前提情報とする場合 ——」（金蘭美・金玄珠との共同執筆）、『日語日文学』84輯、23-38、2019年11月、大韓日語日文学会（KCI／韓国研究財団塔載誌、査読有）
3. 「短期日本語プログラムの授業実践と展望 —— 「成果発表」の指導における課題と改善への取り組み ——」（藤田恵・丸山千歌との共同執筆）、『日本語・日本語教育』第3号、立教大学日本語教育センター、2020年

研究発表

1. 「日本語インタビューテストにみられる「くり返し」の使用とレベル別特徴」（西部由佳・岩佐詩子・坂井菜緒・萩原孝恵・奥村圭子との共同発表）、口頭発表、第28回小出記念日本語教育研究会、於国際基督教大学、2019年6月29日

2. 「日本語学習者における「テシマウ」の使用の特徴：YNU コーパス、及び8つのメールタスクデータを用いて」（金蘭美・曹娜との共同発表）、口頭発表、第1回国際日本語プロフィシエンシー研究シンポジウム、於大連外国語大学、11月2日
3. 「初中級学習者が「聞き手参加型聴解」を行うために——生の雑談分析に基づいて——」（山森理恵・奥野由紀子との共同発表）、口頭発表、第1回国際日本語プロフィシエンシー研究シンポジウム、於大連外国語大学、11月2日
4. 「日本語インタビューテストにおけるターン受取後の「考えている」表現の分析——学習者のレベル別差異とその特徴——」（西部由佳・岩佐詩子・坂井菜緒・萩原孝恵・奥村圭子との共同発表）、口頭発表、日本語教育学会2019年度第5回支部集会、於関西大学千里山キャンパス、3月14日（発表予定）

その他

1. 交流ひろば出展「短期日本語プログラムにおけるプレゼンテーションの指導——限りのある時間を利用した指導方法とは——」（藤田恵との共同発表）、2019年度日本語教育学会秋季大会、於くにびきメッセ、2019年11月23日

研究助成

1. 2019.4～至現在 科学研究費助成金（基盤研究（C））「初級から学べる段階別学習型作文支援システムの構築」（研究分担者）（課題番号：19K00734）

藤田 恵

研究論文

1. 「短期日本語プログラムの授業実践と展望——「成果発表」の指導における課題と改善への取り組み——」（金庭久美子・丸山千歌との共同執筆）、『日本語・日本語教育』第3号、立教大学日本語教育センター、2020年
2. 「点字で学ぶ初学者のための母語別音声ガイド付き日本語点字導入教材の作成——中国語による音声ガイド作成の試み——」（浅野有里、河住有希子、北川幸子との共同執筆）、『日本語・日本語教育』第3号、立教大学日本語教育センター、2020年

その他

1. 交流ひろば出展「短期日本語プログラムにおけるプレゼンテーションの指導——限りのある時間を利用した指導方法とは——」（金庭久美子との共同発表）、2019年度日本語教育学会秋季大会、於くにびきメッセ、2019年11月23日

研究助成

1. 2016.4～現在 科学研究費助成金（基盤研究（C））「視覚障害教育から切り拓く国際共生社会における日本語インクルーシブ教育の基盤構築」（研究分担者）（課題番号：JP16K02819）

数野恵理

実践報告

1. 「ゲストセッションを軸に展開するビジネス日本語クラス——プログラムの評価と再計画のサイクル——」『日本語・日本語教育』第3号、立教大学日本語教育センター、2020年

研究助成

1. 2019.4～現在 科学研究費助成金（基盤研究（B））「日本語ライティングにおけるナラティブの Good Writing 探究と評価法の開発」（研究分担者）（課題番号：19H01274）

小林友美

研究論文

1. 「日本人学部生と留学生による就職活動の相談に用いられる相談者の表現形式」『日本語・日本語教育』第3号、立教大学日本語教育センター、2020年

嶋原耕一

研究発表

1. 「グループディスカッションにおける第三者の修復シーケンスの参加」第2回会話分析研究会、於九州大学西新プラザ、2019年9月1日
2. 「修復シーケンスにおいてトラブルソースを常識的知識として扱うことの分析——日本人学生と留学生によるグループディスカッションデータを対象として——」第44回社会言語科学会研究大会、於同志社大学今出川キャンパス、2020年3月6日

研究助成

1. 2018.4～現在 科学研究費助成金（若手研究）「母語話者と非母語話者による成員カテゴリーの交渉と社会的行為について」（研究代表者）（課題番号：18K12433）

執筆者一覧（掲載順）

展望論文 Research Overview

池田 伸子（IKEDA, Nobuko） 異文化コミュニケーション学部教授

研究論文 Research Papers

丸山 千歌（MARUYAMA, Chika） 異文化コミュニケーション学部教授
 小澤伊久美（OZAWA, Ikumi） 国際基督教大学日本語教育課程課程上級准教授
 小林 友美（KOBAYASHI, Tomomi） 日本語教育センター教育講師
 李 奎台（LEE, Kyutae） 日本語教育センター兼任講師
 島崎 英香（SHIMAZAKI, Hideka） 日本語教育センター兼任講師

実践報告 Practice Reports

数野 恵理（KAZUNO, Eri） 日本語教育センター教育講師
 藤田 恵（FUJITA, Megumi） 日本語教育センター特任准教授
 金庭久美子（KANENIWA, Kumiko） 日本語教育センター特任准教授
 浅野 有里（ASANO, Yuri） 日本語教育センター兼任講師
 河住有希子（KAWASUMI, Yukiko） 日本工業大学工学部准教授
 北川 幸子（KITAGAWA, Sachiko） 神田外語大学留学生別科講師
 新井愛一郎（ARAI, Aiichiro） 社会福祉法人国際視覚障害者援護協会理事
 長谷川孝子（HASEGAWA, Takako） 日本語教育センター兼任講師

『日本語・日本語教育』規定

1. 投稿資格

立教大学日本語教育センター員、日本語教育センター科目担当兼任講師、教育研究コーディネーターおよび当センターにおいて適当と認められた者とする。ただし、共著の場合、前述の投稿資格を有する者が1名含まれていなければならない。

2. 内容

日本語教育およびその関連領域。未発表の原稿に限る。

3. 使用言語

日本語または英語とする。

4. 書式

原稿は横書きで、MS Word 形式ないしテキストファイル形式とし、A4判の用紙（40字×35行）で、研究論文は20枚以内、実践報告及び調査報告は16枚以内とする。図表、参考資料、参考文献、注などもこの分量の範囲に含める。文献等の書き方は、『『日本語・日本語教育』執筆要領』に従うこと。

5. 要旨

和文（400字以内）の要旨をつける。キーワードは、和文論文は日本語5語以内、英文論文は英語5語以内を付す。

6. 採否の決定

原稿の採否は本誌編集委員会が決定し、本人に通知する。

7. 編集委員

編集委員会は、日本語教育センター員から選出された4名の委員によって構成する。編集委員の任期は1年とするが、再任は妨げない。

8. 本誌の発行は年1回とする。

9. ウェブサイトにおける公開

掲載論文の執筆者名、要旨、論文本文等を立教大学のウェブサイト等で公開する。

ウェブサイトにおける公開は「立教大学学術リポジトリ運用指針」に基づくものとする。

10. 原稿の送付

次の①～③を下記に郵送すること。

①原稿本体（A4判）1部

②次のものを記した別紙1（A4判）1部

- カテゴリー（研究論文、実践報告、調査報告、のいずれか）
- 和文タイトル及び英文タイトル
- 著者名（和文表記とアルファベット表記）
- 和文要旨（400字以内。要旨末尾に括弧書きで文字数を記載のこと。）
- キーワード（原稿中の主要語句を5語以内）

③執筆者氏名、所属機関名、職位を記した別紙2（A4判）1部

また、MS Word 形式ないしテキストファイル形式のデータを下記のアドレスに送信すること。

「日本語・日本語教育」編集委員会

〒171-8501 東京都西池袋3-34-1 日本語教育センター内

E-mail: cjle-kiyo@rikkyo.ac.jp

『日本語・日本語教育』執筆要領（和文論文）

1. 投稿原稿の構成

投稿原稿は、次の部分から構成されるものとします。この順序で書いてください。（著者名は除く。）

- (1) タイトル（和文・英文）
- (2) 要旨（日本語 400 字以内。要旨末尾に括弧書きで文字数を記載のこと。）
- (3) キーワード（原稿中の主要語句を日本語 5 語以内。）
- (4) 本文（図表を含む）
- (5) 注（必要に応じて）
- (6) 引用文献・参考資料一覧

2. 投稿論文のカテゴリー

(1) 研究論文：

日本語教育および関連領域について、十分に先行研究を把握した上で述べられているもの。

A：先行研究を十分に把握した上でたてた仮説の検証を行っている実践的論文。

B：先行研究を十分に把握した上でたてた仮説の検証を行っている調査論文。

C：先行研究を十分に把握した上で行っている日本語教育に関する提案、提言。

D：これまでに行われている研究、調査論文の総括および解説。

(2) 実践報告：

教育現場における実践の内容、効果等が具体的、かつ明示的に述べられているもの。

(3) 調査報告：

言語データ、史的資料、教育の現状分析や関連する意識調査の結果など、日本語教育にとって資料的価値が認められる報告が明確に記述され、結果の分析が行われているもの。

3. 投稿原稿の書式・分量

- 投稿原稿は「A4 判横書き、40 字× 35 行」で作成してください。原稿はワープロで作成し、図表を含め、できるだけ仕上がり紙面に近い形で原稿を作成してください。
- 分量
研究論文 20 枚以内
実践報告・調査報告 16 枚以内
- 本文（英数字含む）は明朝 10 ポイント、各章の見出しはゴシック 10 ポイント（太字にする必要はありません）とし、行間も統一してください。要旨、注、参考文献・資料で文字を小さく

したり、行間をつめたりしないでください。

- 句読点は「、」「。」で統一してください（表題も含みます）。
- 注は、脚注ではなく後注にし、注の番号は（１）、（２）、（３）…としてください。
- 表番号と表題は表の上、図番号と図題は図の下に記載してください。
- 原稿は片面印刷にし、両面印刷にはしないでください。

4. 資料・参考文献

• 資料

論文内に使用した他者の著作物（図版、写真等）は、投稿前に必要に応じて公開の許諾を得てください。

• 参考文献の書き方は、以下の基準に従うこと。

- （１）論文原稿の最後に、章番号をつけずに参考文献という見出しをつける。資料を載せる場合は、参考文献の後に、資料という見出しをつける。
- （２）参考文献は、日本語による文献（以下、日本語文献）と、外国語（英語、中国語など）による文献（以下、外国語文献）とを、それぞれまとめて、日本語文献、外国語文献の順に記載する。
- （３）日本語文献は、第一著者の姓の五十音順に配列し、外国語文献は第一著者の姓のアルファベット順に配列する。

• 各文献で記載すべき情報は、およそ次の通りです。

- （１）単行本＜単著、共著＞の場合：著者、発行年、書名、出版社名
- （２）単行本＜分担執筆＞の場合：分担執筆者、発行年、当該章の題名、編者、書名、章番号、出版社名、ページ
- （３）学術論文の場合：著者、発行年、題名、雑誌名、巻または号、ページ
- （４）学会発表予稿集（論文集）の場合：著者、発行年、題名、予稿集名（論文集名）、ページ
- （５）教科書の場合：著者、出版年、教科書名、出版社名
- （６）インターネット情報の場合：著者（機関）、発行年、題名、URL、アクセス年月日

• 記載例

（１）単行本＜単著、共著＞の場合

横山紀子（2008）『非母語話者日本語教師再教育における聴解指導に関する実証的研究』ひつじ書房。

Anderson, J. R. (1983). *The architecture of cognition*. Cambridge, MA: Harvard University Press.

（２）編著書中の論文の場合

松見法男（2002）「第二言語の語彙を習得する」海保博之・柏崎秀子（編）『日本語教育のための心理学』第6章、新曜社、97-110。

MacWhinney, B. (1989) Competition and connectionism. In B. MacWhinney, & E. Bates (eds.), *The crosslinguistic study of sentence processing* (pp.422–457). New York: Cambridge University Press.

(3) 学術論文の場合

宇佐美洋・森篤嗣・広瀬和佳子・吉田さち（2009）「書き手の語彙選択が読み手の理解に与える影響——文脈の中での意味推測を妨げる要因とは——」『日本語教育』140号、48–58.

小柳かおる（2002）「Focus on Form と日本語習得研究」『第二言語としての日本語の習得研究』第5号、62–96.

Papagno, C., Valentine, T., & Baddeley, A. D. (1991) Phonological short-term memory and foreign-language vocabulary learning. *Journal of Memory and Language*, 30, 331–347.

(4) 学会発表予稿集（論文集）の場合

迫田久美子・松見法男（2005）「日本語指導におけるシャドーイングの基礎的研究（2）——音読練習との比較調査からわかること——」『2005年度日本語教育学会秋季大会予稿集』、241–242.

(5) 教科書の場合

日本花子・東京次郎・大阪美子（編）（2006）『上級者のための日本語（2）——読解編——』日本語教育書房.

(6) インターネット情報の場合

日本語教育学会（2019）『『日本語教育』投稿要領』<http://www.nkg.or.jp/pdf/touk-ouyoryo.pdf>

（2019年6月14日アクセス）.